

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」 が表す米国の特徴 その一

草薙 太郎

1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。

まずこれら米国シェイクスピア研究学位論文を、米国の(1)移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴(2)そうはいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(3)競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする(フェミニズムが典型)圧力のある特徴を表すものに、三分類する。このことで、逆に分類項目として挙げた米国の特徴が浮かび上がると考える。

なお本稿は、そのまま学術論文の形式によるデータベースとしての役割も付すため、脚注の論文名の後に富山大学図書館請求番号を付け加えた。

2. 米国が移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

この項目はさらに細分して(a)心理学、臨床心理学などに関連するもの(b)枠にとらわれない米国流自由研究(c)映画に関連するもの(d)多民族国家、植民地政策などに関わるもの(e)語学的考察に近いもの(f)実際に演じることからの論考(g)ホモセクシュアルに関わるものに分ける。

(a) 心理学、臨床心理学などに関連するもの

ボーダーレス化の特徴は「学際的」考察にあらわれる。レトリックを心理学と言語学の結合として、シェイクスピアなどを分析するもの¹がある。ブリュゲルの『イカルスの墜落』を扉に掲げ、臨床心理学的読みで、『尺には尺を』を捉えたり、デカルトやセルバンテスなどを例に、哲学と心理学の間を彷徨う論考²がある。これなどは西ヨーロッパの文化的伝統の特徴

1 Czerniecki, Krystian Mare, *The rhetoric of melancholy : Shakespeare, Racine, Kleist*, (1991). 富山大学図書館請求番号902.2||C99||Rh (以下同様)

2 Lezra, Jacques, *Icarus reading: trope, trauma, and event in Shakespeare, Cervantes, and Descartes*, (1990). 902||L59||Ic

も併せ持つ。

「中年以後の鬱」という観点からの論考³は臨床心理学の応用である。影の領域へ入る完璧を求めたアンジェロ、おとなになることを拒絶するトロイラス、原始的魂アニマの女性ヘレナ（『終わりよければ...』）欠陥両親を持つ落胆（ハムレット）といった規定を行い、ユング的人生の不幸を克服する視点でのシェイクスピア論⁴がある。ユングは西ヨーロッパの文化的伝統に深く関るものの、臨床心理学の実践でユング派の活躍を想起させる点がアメリカの文化的ボーダーレス社会の特徴を示す。

主人公の自己客観化に寄与する良きカウンセラーを辿り、ハムレットにホレイショ、リアにケント、また『アントニーとクレオパトラ』のエノババス、『コリオレイナス』のメネニウスなどを分析するもの⁵は、実践的な臨床心理カウンセリングが盛んな米国の実状を反映している。

幼児が母親からミルクを与えられるときに、願望の実現と想ったり、実現せずにベビーベッドを蹴飛ばす代償行為に及んだりすることを幼時体験として論を展開するフロイトの分析をもとにして、思考が現実化すると信じる魔力的思考を分析し、『マクベス』などに適用する論考⁶もある。

『ヘンリー六世』三部作中のグロスター公爵は、無残に父を殺されたがゆえに人間性と距離をおく、ルネッサンスとして新しいタイプの悪党だとする論考⁷も、シェイクスピアを臨床心理分析で映画的に蘇らせた趣きがある。

(b) 枠にとらわれない米国流自由研究

Gallows humor をシェイクスピアの作品について追及する、文字どおり処刑について考察するものがある。赦しも含め政治的というより宗教的な面もある論考⁸である。カトリックのイメージがあるかないかも論じるので、チャールズ一世処刑を強く連想させられる。枠にとらわれない考察がボーダーレスのアメリカの特徴を表す。

1590年代に歴史的文学的哲学的現象としてセネカの伝統が確立したとし(p.24)、セネカのオー

3 Feak, Marcus David, *Aspects of Kleinian Life Span Psychology*, (1995). MF||189||7

4 Porterfield, Sally F., *Inner players: a Jungian reading of Shakespeare's problem plays*, (1992). 932||Sh||Po

5 Datta, Pradip Kumar, *The role of the good counselor in selected Shakespearean Tragedies*, (1991). 930.28||Sh||Dat

6 Favila, M. C., *Magical thinking in Shakespeare's tragedies*, (1995). MF||189||52

7 Evans, Christopher W., *Determined to Prove a Villain: A Reexamination of Shakespeare's Duke of Gloucester*, (1995). MF||189||14

8 Spencer, Janet Marie, *The politics of mixed-genre drama : the comic treatment of punishment spectacles in Shakespeare*, (1990). 930.28||Sh||Spen

ヴィッド的ヴァージルの聖書的インターテキストが復讐悲劇の象徴的枠になり(p.118), 「彼女は女だ, ゆえに求愛せられるべき・・・」といった引用をしてセックスと暴力について論じる(p.119)もの⁹がある。西ヨーロッパ文化の伝統があることは確実ながら, そこからさらにセックスと暴力が荒れ狂う米国自身を照射し, たとえばジュリー・テイモアが監督し, パートナーのエリオット・ゴールドデンサルが音楽を担当した映画『タイタス』(1999)の解釈根拠にしてもいいような論文という意味で, 移民を受け入れ, 自由の国としてのクリエイティヴ重視の伝統に分類できる。

馬術の観点でシェイクスピア作品解析するもの¹⁰も, それだけなら英国の伝統研究になる。しかし, その背景にカウボーイ文化の視点があることを考えると, むしろ枠にとらわれない米国的考察の領域になる。

モラル, 罪, 性などに関わるエンブレムをロマンス劇から集めて論考するもの¹¹がある。ロマンス劇をエンブレムで読み解くのは西ヨーロッパの伝統にたつものながら, モラル, 罪, 性などに関わるものを集める点に米国流自由研究の趣きがある。ハムレットの内面の問題(オエディップス・コンプレックス, ディレイなど)を, どこか犯罪心理学のように考察するもの¹²も同様である。

食物で作品を解析し, タイモンは拒食症であるとし, 『冬物語』の人間関係を『ソネット集』の食物の比喩で表された支配構造のように解析し, ヘンリー四世をめぐる父子関係も『じゃじゃ馬馴らし』も食物と支配関係で読み解けるとする論考¹³は実践的な臨床心理学か心身症治療と文学論の結合になる。

葬式とは限らず, 死を嘆く場面をシェイクスピアの作品から集め, 感情中心の分析を行う論考¹⁴がある。学部卒論レベルならどこの国でもありそうな研究方法ながら, それで学位が取れるところが米国ならではではなかろうか。

ラカンやベーコン, ロック, アリストテレスなど交えたバロック芸術論で, ダンの詩や『嵐』もバロックで括るところに意味があると考えられる論考¹⁵は, 人生哲学のボーダーレス化と

9 Sutherland, Jean Murray, *Shakespeare and Seneca: a symbolic language for tragedy*, (1985). 930.28||Sh||Sut

10 Nelson, Barbara (Barney), *Shakespeare's use of horsemanship language*, (1991). 930.28||Sh||Nel

11 Cho, Kwang Soon, *A study of emblems in Shakespeare's last plays*, (1990). 932||Sh||Cho

12 Russell, John Joseph, *Hamlet and Narcissus : on the relevance of contemporary psychoanalytic theory to Shakespearean tragedy*, (1991). 932||Sh||Ha=Rus

13 Jaynes, Nanette Hazel, *Nurturing Process and the Creation and Stabilization of Self in Selected Works of Shakespeare*, (1995). MF||189||34

14 Kazarian, Albert I., *Shakespeare's representations of mourning in seven plays*, (1990). 930.28||Sh||Kaz

15 Bornhofen, Patricia Lynn, *Cosmography and Chaography: Baroque to Neobaroque, A study in Poetics and Cultural Logic*, (1995). MF||189||16

いった観を抱かせる。

非在存在（そこにはない虚のイメージ）をシドニー、シェイクスピア、エミリー・ディキンソンなどを材料に、読者、作者、愛しあう二人の関係を主に考察するもの¹⁶は屈折したトランセンデンタリズムを思わせる。

(c) 映画に関連するもの

ゼフィレリ、ブルックによる映画の比較分析ながら、前者は『ロミオとジュリエット』後者は『リア王』なのだから、手法の違いは作品による必然とも思える論考¹⁷がある。これなどは元の作品より映画化された結果を重視する点で米国を押し出す論考といえる。映画は最も米国的な「映画的ヒューマニズム」表現の手段であって、民族の枠を超えたボーダーレスな思想表現である。

黒澤明が『マクベス』を『蜘蛛の巣城』に翻案するとき、能をどのように使ったか、序破急などの技術論を展開する論考¹⁸はまさにそのことを表している。

グリーンブラットのコロニアリズム論によって植民地政策と国籍と言語の関係を論じるもの¹⁹がある。まさに移民の国アメリカならではの論考である。

(d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

戦前は坪内逍遙からの訳しかなく、戦後アメリカの影響でやっとシェイクスピア原文からの直接の韓国語訳が出たとする、韓国におけるシェイクスピア受容史についての論考²⁰がある。アジア系の移民も飲み込み、世界の文化を包含する米国の特徴が表れている。

アメリカのユダヤ人社会でのシェイクスピア受容を考察したもの²¹は、多民族国家米国の特徴そのものである。

(e) 語学的考察に近いもの

一切意味に立ち入らず、ソネットの意味の切れ具合のみ（会話的な終わり、意味のまたがり等）を論じたもの²²は技術主義に徹する米国の一面をみせる。『ハムレット』をコミュニケー

16 Martin, Maggie, *The Transcendental Element in the Absent Presence*, (1995). MF||189||46

17 Biesinger, Kathy, *Style and signification in Shakespeare film: a study of the narrative realism of Franco Zeffirelli and the symbolism of Peter Brook*, (1990). 930.28||Sh||Bie

18 Lai, Ming Liang, Akira Kurosawa's use of Noh in "The throne of blood", his film adaptation of William Shakespeare's "Macbeth," (1993). 932||Sh||Ma=La

19 Baker, David John, *Who talks of my nation?: colonialist representation in Shakespeare and Spenser*, (1991). 930.25||B17||Wh

20 Kim, Jong-hwan, *Shakespeare in Korea: 1906-1989*, (1992). 930.28||Sh||Kim

21 Berkowitz, Joel Baruch, *Shakespeare on the American Yiddish Stage*, (1995). MF||189||19

22 Hawkins, Paul, *Toward a Practical Poetics of Rhythm: Kinds of End-Stop and Enjambment*, (1995). MF||189||1

ション論で解析する論考²³も同様である。(語学的考察ならシェイクスピアだけにこだわるべきでないのだから、一種ユニークな考察になる。)

(f) 実際に演じることからの論考

『十二夜』を実際に演じてみて、ヴァイオラの両性具有の心理を考察したもの²⁴がある。チャールトン・ヘストンへのインタビューも付録に収録し、クレオパトラの演じにくさなどについて考察したもの²⁵もある。

コロラド・シェイクスピア・フェスティバルの記録²⁶は、それで学位が取れるという点を含め、米国のボーダーレスでクリエイティブな実状を表している。16世紀英国の実状に「似ている」ともいえるが、そこに「こだわる」わけではない。

(g) ホモセクシュアルに関わるもの

シェイクスピアやマローウを中心にイギリス・ルネッサンス文学をホモ愛好とホモ恐怖症で解析するもの²⁷は、ボーダーレス社会米国を表す。ホモとは性のボーダーレスであって、アングロ・サクソンやゲルマンの、密かな、裏側の民族的自意識でもある。ルネッサンスのラテン語教育を、ホモとコピー文化の観点で、リリーやシェイクスピア(『ウインザーの陽気な女房たち』のページ・ボーイのシーン)から分析するもの²⁸もある。

シーザーについて、英雄としての評価と独裁者としての否定的評価との矛盾を、イギリスのルネッサンス期、シェイクスピアの作品を通じて追及する論考²⁹は、強い男志向のホモエロティシズムと、多民族、大衆社会米国の特徴を表す。

戦場での死と愛、ベッドに押し付けられて死ぬという拷問とセックスをかけた表現など、マローウやシェイクスピアの作品をホモエロティックという観点から分析するもの³⁰もあるし、ホモセクシュアルの観点からのオーデン論ながら、そうした詩についてシェイクスピアとの関

23 Lortie, Denis, *Pour une Approche Pragmatique de la Communication dans la Tragedie d'Hamlet, Prince du Denmark, de William Shakespeare*, (1995). MF||189||2

24 Acosta, Gena, *An Acting Analysis of Viola in William Shakespeare's Twelfth Night*, (1995). MF||189||12

25 Soughers, Leslie A, "Immortal Longings" *Voluntary Death in Antony and Cleopatra*, (1995). MF||189||13

26 Nichols, Lynn Wayne, *The evolution of the Colorado Shakespeare Festival*, (1992). 930.28||Sh||Ev

27 Reschke, Mark Peter, "More sharp than filed steel": *Homophilia and Homophobia in English Renaissance Literature*, (1995). MF||189||42

28 Pittenger, Elizabeth, *The Traffic in Pages: Pedagogy, Pederasty, and Printing in the English Renaissance*, (1994). MF||189||24

29 Yu, Jeffery J., *Renaissance Caesars and the Poetics of Ambiguity: Dramatic Representation of Julius Caesar in the English Renaissance*, (1995). MF||189||53

30 Foster, John Evan, *Beaux and Eros: Homoerotic Desire in Elizabethan Political Drama*, (1995). MF||189||56

連も論じる論考³¹もある。

3. 米国が西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴

この項目はさらに細分して(a) 主として英国と関連するもの (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの (c) 西欧文化全体と関わるものに分ける。

(a) 主として英国と関連するもの

シェイクスピア喜劇, マーロウの『フォースタス』などで魔法論を展開し、『嵐』分析で魔法をかけることもとくことも人間の限界提示とする論考³²がある。枠にとらわれぬ自由な論考とも見えるが、ルネッサンスから王政復古期までの英国における科学と魔法と演劇の関係を考えれば西ヨーロッパ文化の伝統の存在は明らかである。

食欲イメージ(スパージョン引用)でスペンサー, デカー, ジョンソン, シェイクスピア, ミルトンを分析する論考³³は, すでに古典となったスパージョンの手法で西欧伝統文化にこだわる分析と考えられる。

オセロが武勇伝を語ったことが「唯一オセロがデズデモーナをたぶらかす魔術」だとオセロが身の潔白を示す。この場面を引用してシェイクスピアの「語り」全般を論じる論考³⁴は, 米国ではなく英国の研究論文だといわれてもおかしくない伝統的手法を採用している。

『冬物語』の四幕でフロリツェルがパーディタのダンスを評し move still ということを取り上げ, 自然との関係を論じ, 「言葉遊びの回復」という観点からの Coleridge 論を展開する論考³⁵も同様である。

『ハムレット』の劇中劇などの上演史, 役者史を中心にした論考³⁶は実践重視といいながら英国の歴史に深くこだわっている。18世紀初頭ロンドンでは, ただ正統性に無関心であることからシェイクスピア喜劇についてショービジネスへの移り変わりが起こったとする論考³⁷,

31 Bozorth, Richard Robert, *The Angler's Lie: Auden and the Meanings of Homosexuality*, (1995). MF||189||57

32 Swedlow, Jessica Eve, *Art to Enchant: Shakespeare's magic*, (1990). 930.28||Sh||Sw

33 Yim, Sung Kyun, *Govern well thy appetite feeding imagery and Renaissance thought in Spenser, Dekker, Jonson, Shakespeare, and Milton*, (1990). 930.2||Y5||Go

34 Haslem, Lori Schroeder, *And thereby hangs a tale : stories and storytelling on the Shakespearean stage*, (1990). 930.28||Sh||Has

35 Kennard, *Lawrence Rochfort, Coleridge and Rehabilitation of Word Play*, (1995). MF||189||3

36 Macdonald, Paul Alan, *Macready, Irving, and Beerbohm-Tree: Image, and the Play Scene from Hamlet*, (1996). MF||189||4

37 West, Katherine Noel, *All this we must do, to comply with the taste of the town: Shakespearean Comedy and the Early Eighteenth-Century Theatre*, (1995). MF||189||6

シェイクスピアに影響を与えた宮廷劇的な作品を読んでみた、という論考³⁸も同様である。

ジェームズ一世の長男ヘンリーへの国民の期待と『ペリクリーズ』を結びつけ、時代の気分を捉える論考³⁹は18世紀英国に立返らせてくれる。

貧乏人が犯罪や疫病の巣として嫌われたり、同時に労働力源として尊重されたりする社会情勢の変化に対応して、文学でも貧乏を悪とするものや徳とするものが現れる。1600年前後のイギリスについてこうした観点での考察を行ない、シェイクスピアの、金持ちが境遇が変わって初めて知る貧乏分析(『リア王』)は長続きせず、すぐステレオタイプの貧乏人を描く物語りが登場するとするもの⁴⁰は、貧乏という観点で西欧にこだわっている。

(b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの

シェイクスピアと年代がそう違わない Lope de Vega はスペインの偉大な劇作家で、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(悲劇的結末)と *Castelvines y Monteses* (ハッピーエンド)を、同じイタリアのソースをもとに執筆された観点から比較考察し、Lopeの方が深い死を考察した愛のモラルを描くとするもの⁴¹がある。父と子の関係を歴史劇でたどる、叙事詩的感覚の論文⁴²がある。米国が父祖の地である西欧を忘れていない証拠を確かめるような感覚である。

スペインの、Calderon など喜劇に注目し、女性問題も焦点にしてシェイクスピアと比較考察するもの⁴³がある。女性問題よりスペインに力点があるとみれば、米国が西ヨーロッパの文化の伝統にこだわる例になると考えられる。

シェイクスピア、スコットなどの作品と、著名なドイツ系作曲家の歌と、歌詞を英語、ドイツ語で対照的に考察し、音楽をめぐるイギリスとドイツの交流を考察するもの⁴⁴がある。付随した独特のロマンティシズム(戦う男性の慰安、休息?)が特徴的である。これらは精神において、米国は依然として西欧だと感じさせる。

38 Nolan, Michael, *A Modern-Spelling Critical Edition of The Thracian Wonder*, (1993). MF||189||9

39 Early, Mary Jane, *Cymbeline as Occasional Play*, (1995). MF||189||33

40 Pories, Kathleen Gail, *Fashioning the Face of Poverty in Early Modern England*, (1995). MF||189||44

41 Badendyck, Cynthia Rodriguez, *The lovers of Verona in Lope de Vega and Shakespeare : problems in comparison*, (1990). 901.9||R61||Lo

42 Buck, William Stuart, *Shakespeare's epic of fathers and sons*, (1990). 930.28||Sh||Buc

43 Roman, David, *Constructing comedy: Shakespeare and Calderon*, (1990). 902.2||R66||Co

44 Bolthouse, Colleen R, *Was Ist Silvia? Engländerin Oder Deutsche? Restoring The Original English Texts to Songs Schubert set in Translation, a Lecture Recital, together with Three Recitals of Selected Works of H.Purcell, G.F.Handel, W.A.Mozart, F.Schubert,J. Brahms, H.Wolf, F.Poulenc and Others*, (1995). MF||189||31

(c) 西欧文化全体と関わるもの

ソネット55番の愛の永遠性を中心にヨーロッパ詩学の伝統で論じ、ネオプラトニズム論も援用される論考⁴⁵がある。

『夏の夜の夢』など人間が動物に変身することを「人間の領域外れ」を表わして領域拡大が起こったとする論考⁴⁶も西欧の深い森と人間の関係を想起させる。

肉親の死への想いも研究動機にして、煉獄の概念を中世からシェイクスピアまでの文学に見る論考⁴⁷はキリスト教信仰が素朴に発露し過ぎる点が米国的かもしれないものの、西欧にこだわっていることは確かである。

ルネッサンス固有の思想と『ハムレット』の影響関係で、特にモンテーニュの『エッセイズ』など懐疑主義をめぐる論考⁴⁸、T.S.エリオットのアングロ・カトリシズムへの改宗問題を論じるもの⁴⁹、『ヘンリー六世』や『リチャード三世』から予言的(黙示録的)言動を分析し、ジャンヌダルクやリチャード三世にやられた女性たち、王の死を嘆く兵隊の言葉などを例として挙げ、ホロコーストやヴェトナム戦争との類似関係も指摘する論考⁵⁰などは、現代的であっても、深いところで西欧へのこだわりをみせている。

古代ギリシャの物語が中世を経て西欧に伝えられ、シェイクスピアに取り入れられ、素朴なキリスト教信仰があるゆえに異教趣味が尊重され、ルネッサンスの人間開放感覚で古代ギリシャ起源の物語にひかれる素朴さがあったのが、啓蒙思想という威信追求で廃れることを指摘する論考⁵¹がある。

悪は肉体や世界から来るものであって、自己とは何かを悟ることで悪や苦しみから脱するとするグノーシス派の説を、『ハムレット』『リチャード三世』『モルフィ公爵夫人』『フォオスタス博士』に適用してみる論考⁵²がある。

シェイクスピアの詩句と幽霊、革命感覚の結びつきを論じ、幽霊現出のマシンを造った人物、ブリュメール18日などフランス革命の感覚とマルクス、ナポレオン二世の革命、マクベスの

45 Schwartz, Louis, *Old love's great power: mimesis, imitation, and the authority of poetry in Petrarch, Wyatt, and Shakespeare*, (1989). 931|Sch9||O1

46 Shutz, Andrea Kadi, *Theriomorphic Shape-shifting: An Experimental Reading of Identity and Metamorphosis in Selected Medieval British Texts*, (1995). MF||189||5

47 Murphy, John Lancaster, *The Idea of Purgatory in Middle English Literature*, (1995). MF||189||18

48 Doloff, S. J., *Shakespeare's "Hamlet" and renaissance skepticism*, (1995). MF||189||20

49 Robinson, Richard David, *T.S.Eliot's Apprehensions of Incarnation, 1927-1930: Four Ariels and "Ash-Wednesday"*, (1995). MF||189||21

50 Hatcher, R. R., *Prophecy and apocalypse in Shakespeare's first tetralogy*, (1995). MF||189||25

51 Robins, William Randolph, *Ancient Romance and Medieval Literary Genres: Apollonius of Tyre*, (1995). MF||189||29

52 Trotter, Jack Eugene, *Another Voyage: The Drama of Gnostic Modernity in Shakespeare, Marlowe and Webster*, (1995). MF||189||30

台詞の「最後のシラブル」などを結び付け論じる、シェイクスピアとホラー感覚を連合させる論考⁵³は、やや猟奇的趣ながら、西欧へのこだわりであることは確かだ。

ロンドンの地理学を延長して劇場論を展開し、場所と演劇性の関係を論じるもの⁵⁴、「フランス便り」ともいえるニュース・クオーターを資料に、シェイクスピアの『恋の骨折り損』マロウの『パリの大虐殺』『タンパレン大王』といった同時代ものを分析し、様式的とも見えるこれらが、意外に事実を踏まえ、事実の持つ単純性を感じさせるとする論考⁵⁵は西欧に時空を超えて移動するかのようなこだわり具合だ。

シェイクスピアをカトリックと決め付ける。家系をたどりレイディ・ゴディバと親戚だったとまでつきとめる。大陸のカトリックの学校にも行ったとし、エセックスの反乱、ピューリタンとの『十二夜』での関係、カトリックのサウサンプトン伯爵との関係まで論じる論考⁵⁶がある。これはシェイクスピアをエドモンド・バークにすれば、バークをカトリックと決め付けた偏見のことを連想させる。しかし、だから、バーク、マローン、アイルランド演劇運動、ギャリックとの関係も連想できる。オックスフォード伯爵グループもどちらかといえばカトリックだった点を考え合わせると、英国と西欧の宗教的偏見を生き生きと描き出す論文を米国人が書けることを表している。つまり、それだけ米国は西欧に親和力が依然あることになる。

4. 米国が競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする圧力のある特徴

この項目はさらに細分して(a) フェミニズムに関するもの (b) 社会学的な考察をするもの (c) 政治に関わるものに分ける。

(a) フェミニズムに関するもの

ヴェールを被った女性ということでシェイクスピア作品の登場人物女性の曖昧さを論じる論考⁵⁷がある。これだけでマイノリティーがメジャーになろうとするフェミニズムを指摘するのは行き過ぎにもみえる。しかし、特定の女性登場人物を論じるというより「女性」を一括して論じる視点があることは、フェミニズムのヴァリエーションとみてよいと考える。

53 Harries, M., *Scare quotes and reenchantment: Shakespeare, Marx, Keynes*, (1995). MF||189||41

54 Sullivan, Garrett Arthur Jr., *The Theatre and Social Relations in Early Modern England*, (1995). MF||189||49

55 Voss, P. J., *The unfortunate theater of France: Shakespeare, Marlowe, and the Elizabethan news quarto, 1589-1593*, (1995). MF||189||50

56 Enos, Carol Curt, *Shakespeare and the Catholic Religion*, (1997). MF||194||15

57 Jones, Kathryn Blair Logwood, *Shakespeare's veiled women: icons for the problem of female ambiguity*, (1990). 930.28||Sh||Jok

夫を亡くせばどうなるかという視点でシェイクスピアの登場人物の女性を分析するもの⁵⁸などは、そうしたフェミニズムの視点をとる。女性の男装はフェミニズムか家父長主義への服従かを論じるもの⁵⁹も同様である。

家父長支配をめぐるフェミニズムの見地の論文ながら、シェイクスピアは王の政治的肉体、生身の肉体、神秘の肉体を作中の描写で用い、ミルトンは17世紀ピューリタンの家父長を描き、デフォーは家父長に反抗する家来、ホーソンはピューリタンの家父長を描くといった視点での分析を行うもの⁶⁰がある。

フェミニズムの権力関係で、台所の小娘が「かしこまりました旦那様」というだけでも「権力」を持つことがあるとし、プロバガンダではない分析力を強調する論考であって、リア王にとって完全に支配でき、かつ頼り切れる存在としてのコーデリアや、だきしめて殺される快楽を味合うジュリエットなどといった、肉体に注目する視点での考察もするもの⁶¹、フェミニズムの論調で明治の女優分析を行なうもの⁶²、男性の結婚相手としての存在でしかないシェイクスピアの作中の女性の立場を分析し、オセロに従うべき立場でしかないため、かえってオセロをデズデモーナは守れないし、初めて独立した存在となれる豊かな寡婦も滑稽な喜劇の筋の中心として誰かを不満足にするとし、こうしたゆがんだ女性観は是正すべきだとする論考⁶³などもある。

クレシダの物語の系譜を作者不詳の伝承時代から、チョーサー、シェイクスピア、その王政復古期の改作へとたどり、女性の取扱いが曖昧な状態から明らかなアンティフェミニズムへと変わったとする論考⁶⁴もある。

異性装問題を、新歴史主義、フェミニズム、カルチュラルスタディーズなども踏まえ、外形で性を語る限界に迫るとする論考⁶⁵がある。これはボーダーレスの方に分類すべきともみえ

58 Oakes, Elizabeth Thompson, *Heiress, Beggar, Saint, or Strumpet: the widow in the society and on the stage in early modern England*, (1990). 930.2||Oa4||He

59 Chang, Hsiao-hung, *Transvestite sub/versions: power, performance, and seduction in Shakespeare's comedies*, (1990). 930.28||Sh||Ch=Um

60 Porter, Susan Speer, *Domination and Dissent: Gendered Duality and Patriarchal Authority*, (1995). MF||189||17

61 Blaha, Susan Sally, "You should be women": *Constructions of Femalesexuality in Shakespare's Tragedies*, (1995). MF||189||26

62 Kano, Ayako, *Action Like a Woman in Modern Japan: Gender, Performance, Nation, and the Roles of Kawakami Sadayakko and Matsui Sumako*, (1995). MF||189||27

63 Davies, Lindsay C., *Neither Maid, Widow, nor Wife: Gender, Drama, and Society*, (1995). MF||189||28

64 Park, Yoon-hee, *Rewriting Woman Evil?: Antifeminism and Its Hermeneutic Problems in Four Criseida Stories*, (1995). MF||189||32

65 Sedinger, Tracey, *Epistemology of the Crossdresser: Sexual Policy in Early Modern England*, (1995). MF||189||43

る。しかし、この論文のいわんとするところは「外形で性を語るな」というマイノリティーの叫びである。

王が騎士たちのサーヴィスの見返りに土地を与える封建性は女性に土地所有権を与えない。しかしイギリスでは複雑な形で女性に土地、土地をめぐる遺産など物質的権利が認められてくる。それとシェイクスピアの作品との関連を指摘し、土地所有感覚での支配被支配を女性登場人物で分析する手の込んだフェミニズム論文がある。土地所有権の最たるものとしての父権支配もいう。クレオパトラの「愛はどのくらい」、『じゃじゃ馬馴らし』での結婚の契約性と女性の物質支配などを例に挙げる⁶⁶ ものである。

フェミニズムの立場からのシェイクスピア研究を概観し、男女の性区別の曖昧さ、身体との関係などをシェイクスピアと同時代の喜劇も材料に分析し、良家の子弟が他家へ奉公する慣習などから使用人の立場分析もする。要するに家父長が支配する家族秩序を崩す要素に着目するフェミニズム的論考⁶⁷ がある。

マーストンの作品に出てくる様々な立場の女性たちを取り上げ、その性同一性についてフェミニズム的な考察をする。社会的立場の補強のために女性であることからくる力をどう使うかに着目する論考⁶⁸ もある。

クレシダはコケットではなく戦争に引き裂かれた若い女性であるとする論考⁶⁹ もフェミニズムのヴァリエーションである。

結婚前の欲望と清潔感を基軸に女性の性の表現を考察し、ペトラルカ的修辞やオーヴィッドとの影響関係にも言及するもの⁷⁰、姿を消した夫に代わって夫であると主張する男性が現れると、それが嘘とわかっていて受け入れた女性の挿話をもとに、グリーンブラット的新歴史主義的寡婦論を展開するもの⁷¹ は、フェミニズムというより「女性問題」という微妙にフェミニズムに絡む新たなヴァリエーションと思われる。

(b) 社会学的な考察をするもの

文芸思潮の社会的表象という、標題どおりエリザベス朝演劇を社会的に捕らえようとし、ヒ

66 Conway, K. M., *Material girls: gender and property in Shakespeare*, (1995). MF||189||51

67 Stirm, J.C., *Representing Woman's Relationships: Intersections of Class, Race, and Generation in English Drama, 1580-1642*, (1995). MF||189||54

68 Senapati, Sukana Behura, *Wenches, Wives, Widows, Whores, and Witches: Representations of Woman and Discourses of Gender Identity in the Plays of John Marston*, (1995). MF||189||55

69 Zambon-Palmer, Angela, *Character Conceptions of Shakespeare's Cressida in Major Twentieth-Century Productions*, (1995). MF||189||11

70 Bly, M., *The invitation to sensuality: development in the rhetoric of desire from 1590 to 1610 in Shakespeare and other...*, (1995). MF||189||45(930.25||B62||In)

71 Chamberlain, Stephanie Ericson, "How Came That Widow In": *The Dynamics of Social Conformity in Sidney, Marlowe, Shakespeare and Hooker*, (1995). MF||189||47

エラルキーに関心を示して作品分析したもの⁷²がある。社会学的な考察は英国が発祥の地かもしれない。しかし、それは伝統的な考察とは違う。それは初めからマイノリティーがメジャーになるようとする圧力があって成立する考察という面があって、米国という競争社会ではその面が強くなる。

社会学的歴史的コンテキストとテキストの関係を考察し、そこに上演問題を絡めるといった手法で、ヘンリー・シリーズは、結局国家や政治から家族と個人に焦点が移っていることを指摘する論考⁷³がある。これも、国家や政治から家族と個人に焦点を移しながら世界を席卷してゆくアングロ・サクソン民族の、マイノリティーをメジャー化する圧力を内部にも外部にも持つ特徴を表しているのではなかろうか。

シェイクスピアは、社会儀礼とみなせる事柄を場面設定し、そのことで演劇としての効果を高めながら、社会的評価と個人としての生き方のずれを描くとする論考⁷⁴がある。アメリカの競争社会としての個人に対する圧力が反映した論文だと考える。ルネッサンスのレトリックを言葉の社会儀礼と捉える論考⁷⁵もそのヴァリエーションである。

(c) 政治に関わるもの

「欲望の政治学」として登場人物の君主の戦争責任論のようなものを展開する論考⁷⁶や、歴史劇の「未来」=変化とする論考⁷⁷などは、米国の現実の政治を反映して、競争社会の政治そのものを表している。歴史劇、シドニーの作品をマゾヒズムの観点で解析した論考⁷⁸は、臨床心理学的ながら、歴史全体に臨床心理学的であろうとするスケールの大きさは、むしろ政治を語るものではなかろうか。

チャールズ一世と議会の対立と、シェイクスピアや Jonson のローマ劇とを対比させ、アメリカ=ローマがアメリカ建国時の感覚で語られるが、イギリスの王権分析には少し違和感がある論考⁷⁹がある。これも語りたいのは米国の政治だと考えられる。プロスペローの筆折に関

72 Holbrook, Peter James, *The social symbolism of literary modes in the English Renaissance : social interplay in Shakespeare, Nashe, and bourgeois tragedy*, (1990). 930.25||H69||So

73 Martin, Richard Alexander, *Textual theatricality: the figure of the stage in Shakespeare's second Henriad*, (1990). 930.28||Sh||Mart

74 Giese, Loreen Lee, *Denied identities: social rituals in selected Shakespearean drama*, (1991). 930.28||Sh||Gie

75 Sawin, Sheryl Drobny, *Ritualizing the Word: Renaissance Dramatizations of Eloquence*, (1994). MF||189||22

76 Song, Chang-seop, *The politics of desire: William Shakespeare's "history" and the question of subjectivity in "Richard III", "Richard II", "Henry IV I", and "Henry IV II"*, (1993). 932||Sh||R3=So

77 Hartley, John David, *Shakespeare's Concepts of the Future in the Tetralogies*, (1995). MF||189||8

78 Ellis, James Richard, *Architectonics of the Self: Negotiating Male Subjectivity in Elizabethan Narrative Poetry*, (1995). MF||189||10

79 Gu, Zhen, *Roman History Plays: Critique of Royal Absolutism*, (1995). MF||189||15

して著者論議から政治論に及ぶ論考⁸⁰ もそのヴァリエーションとみなせる。

70年代にシェイクスピアと言語不信論が流行ったことから説き起こし、プラトニックとソフィスティックの区別も援用して、喜劇を論じるもの⁸¹ がある。一見学際的考察とも西ヨーロッパの文化伝統にたったものともみえるが、70年代の体制批判がベースになっている点からこの項目に分類したい。70年代とは大学紛争という政治の季節であった。

80 Ross, A. E., *Shakespeare's "Tempest" and the issue of authorship in the renaissance*, (1995).
MF||189||23

81 French, Tita, *A rhetoric of comedy: essays on language as a theme in Shakespeare's comedies*, (1985).
930.28||Sh||Fret